



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | ヴァイマルのなかのブルトマン、近代世界のなかの神学：深井智朗先生の御講演に対するコメント                                      |
| Author(s)        | 佐藤，貴史                                                                             |
| Description      | 日本基督教学会北海道支部2013年度公開シンポジウム「ヨーロッパ神学史の新しい見方」．2013年6月1日．北海学園大学，北海道．                  |
| Citation         | 日本基督教学会北海道支部公開シンポジウム記録，3，37-51                                                    |
| Issue Date       | 2014-03-25                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/95228">https://hdl.handle.net/2115/95228</a> |
| Type             | conference paper                                                                  |
| File Information | jscsh_003_37.pdf                                                                  |



## [コメント1]

### ヴァイマルのなかのブルトマン、近代世界のなかの神学 —深井智朗先生の御講演に対するコメント—

佐藤貴史

#### はじめに

ルドルフ・ブルトマンという名を聞いても、「脱神話化」というキーワードしか思い浮かべることができない筆者(佐藤)にとって、深井先生の御講演は初めて聞く話ばかりであり、きわめて多くの刺激に満ちていた。ブルトマンを取り巻く社会史的コンテクストの緻密な分析、当時の神学者集団の思想的違い、そしてもちろんブルトマンのテキストの読解など、そこから多くの議論を学ぶことができた。とはいえ、ブルトマンの良い読者ではない筆者(佐藤)では、御講演の内容に直接的な仕方で応答することはできない。それゆえ、ここでは御講演の内容に関するコメントや質問というよりも、筆者(佐藤)がその内容を聞いて考えた事柄や、そしてみずからの課題として引き受けなければならない論点について、T. レントルフやF. W. グラーフの研究も参照しながら述べてみたい。

#### 1. Theologieggeschichte について

御講演とも内容的に密接な関係にある深井先生の御著書『ヴァイマルの聖なる政治的精神』(岩波書店、2012年)では、ドイツ思想史研究の重要な課題として、「ヴィルヘルム期からヴァイマル共和国の時代への転換期における神学の社会的機能」、神学と時代

精神の関係、時代の政治的動向が神学に与えた影響の検証があげられ、すべてとは言えないかもしれないが「多くのプロテスタンティズムの神学者たちはむしろ時代精神に対して雄弁であった」と書かれている<sup>1</sup>。神学を時代精神、政治史、社会史のもとで読み解くことの重要性は、わたしが大学院生時代に先生から初めて聞いた重要な課題だと記憶している。この度の御講演も、上記の方法論的な問題意識のもとで議論されたものと考えてよいだろう。

またこのような方法論と呼応するのが、ミュンヘン大学の F. W. グラフのグループが雑誌 *Zeitschrift für Neuere Theologiegeschichte/Journal for the History of Modern Theology* で展開し、その第一号の巻頭言において *Theologiegeschichte* という言葉で表現されている方法論であろう<sup>2</sup>。この概念をどのように訳すべきかは難しいところだが（たとえば「神学史的 - 社会史的方法」<sup>3</sup>）、彼の議論にしたがって少し説明すると、グラフによれば「神学のはっきりとした歴史的自己理解」と「神学的反省の歴史性」<sup>4</sup>に立脚した *Theologiegeschichte* は、*Dogmengeschichte* や *Kirchengeschichte* とは一線を画しながら、キリスト教神学と（政治や経済を含めた）社会の関係を扱おうとする歴史叙述の概念であると言う。

このような歴史的な知に基づいた *Theologiegeschichte* はドイツにおいて 18 世紀以降に始まるものであり、時代が 19 世紀へと移行

---

<sup>1</sup> 深井智朗『ヴァイマルの聖なる政治的精神 ドイツ・ナショナリズムとプロテスタンティズム』（岩波書店、2012 年）、23 頁。

<sup>2</sup> ここでの *Theologiegeschichte* の議論は以下の拙論と一部内容が重複している。「越境する歴史叙述——方法論をめぐる一断片——」（『聖学院大学総合研究所 Newsletter』Vol. 19-1、2009 年 5 月）。

<sup>3</sup> 深井『ヴァイマルの聖なる政治的精神』、291 頁。

<sup>4</sup> Richard Crouter, Friedrich Wilhelm Graf, Günter Meckenstock, "Editorial." *Zeitschrift für Neuere Theologiegeschichte/Journal for the History of Modern Theology*, 1. Bd., 1.

するなかで「神学という学問の歴史」<sup>5</sup>は多くの神学者や歴史学者によって著され、同時にそれは「すぐれて現在的な連関」<sup>6</sup>によって規定されていた。すなわち「神学の歴史 (Theologiegeschichte) を媒介としながら、初期の神学史家たちは啓蒙主義の過程のなかにある学問理解の急速かつ劇的な変化を考察していた」<sup>7</sup>のである。彼らは、まさに 18 世紀の神学における変動を「神学的革命」や「思惟革命」として解釈していた<sup>8</sup>。

そして 19 世紀になるとすでに、Theologiegeschichte という概念はドイツのプロテスタント神学者たちによって「近代神学の歴史」<sup>9</sup>へと限定された。彼らは「キリスト教の歴史の時代区分」<sup>10</sup>を行うが、そこでは同時に「古プロテスタンティズム」と「新プロテスタンティズム」という区別もなされた。くわえて彼らは、Theologiegeschichte を「近代という地平における神学の多元化の歴史」<sup>11</sup>、すなわち「近代적かつ市民的解放と超教派的で理性的な理想像」<sup>12</sup>から強い影響を受けた「新プロテスタンティズム」の歴史として構想したのであった。

啓蒙主義、ドイツ観念論、そしてロマン主義による神学的思惟の変化、近代の宗教批判、そしてそれに伴う社会の変動を視野におさめた Theologiegeschichte は、こうしてさらに文化史／文化科学的な意味においても理解されて行くことになる。*Zeitschrift für Neuere Theologiegeschichte* もまた「神学の伝統、理念、そして概念が『近代精神』の歴史のなかにもっていた特別な重要性を明確に

---

<sup>5</sup> Ibid., 3.

<sup>6</sup> Ibid.

<sup>7</sup> Ibid.

<sup>8</sup> Ibid.

<sup>9</sup> Ibid., 4.

<sup>10</sup> Ibid., 5.

<sup>11</sup> Ibid.

<sup>12</sup> Ibid.

することに寄与する」<sup>13</sup>ものである、とその雑誌の巻頭言には書かれている。

このような方法論を前提としたうえで初めて、「ブルトマンは脱政治的な神学者なのか」という問い、そして「ブルトマンの『政治神学』」を問うことが可能になるのだと考えられる。また、先生の御講演には「神学の政治化」「政治の神学化」という言葉もあるが、これもまた先に述べた方法論によって見えてくる問題だと思われる。

しかし、上記の議論を踏まえれば、神学の研究において「神学の政治化」「政治の神学化」という現象は、ドイツ・プロテスタンティズムあるいはドイツ・ルター派の特殊な現象と考えてよいのか、あるいは今後、神学の研究はこの社会史的方法によって（ドイツに限らず）塗り替えられていく可能性があるのかという問いが浮上してくる。同時に問いを少し広げるならば、わが国のドイツ神学(史)研究はなぜ社会史や政治史的背景、時代精神を捨象してしまった研究が多かったのかという疑問もわいてくる。つまり、単なる研究の遅れやテキストを入手することの難しさだけでなく、ここにも日本の神学(史)研究における社会史的背景が影響しているのだろうか。言い換えれば、Theologieggeschichte という方法論を日本にも当てはめて日本の神学史を研究することができるのかという問いが、日本のキリスト教神学者自身に向けて立てられると思われる。

## 2. 「宗教的な象徴言語の政治化」(F. W. グラーフ)について

先生の御講演には、先にも述べた「政治神学」「神学の政治化」「政治の神学化」だけでなく、「政治の宗教化」「戦争神学」といった言葉も出てくる。端的に言えば〈政治と宗教〉あるいは〈政治とキリスト教〉の関係が、ブルトマンの神学思想を一つの歴史的事例として把握するという作業を通して浮き彫りにされていると考えてよいだろう。もちろんそこには当時の社会史的状况や時代精神も

---

<sup>13</sup> Ibid., 8.

含まれている。同時にこの両者の関係をめぐる問題は、現代においてもさまざまな地域で、そしてさまざまな現象として議論されていることは論を俟たない。最近、編者の一人としてグラーフが出版した『政治と宗教』の序論においても、この問題が扱われているので、以下その議論を少し追ってみよう。

世俗化テーゼの終焉は、宗教学の世界においてはすでに自明の前提となっていると言えよう。グラーフもまた、多くの近代社会が「諸宗教の永続的な活力と公的空間における宗教的アクターの帰還」<sup>14</sup>によって特徴づけられることを指摘している。J・ハーバマスは、このような事態を「ポスト世俗化社会」と呼んだ<sup>15</sup>。二人の議論は、近代ヨーロッパで生まれた〈政治と宗教の分離〉という偉大な思想がどれほど困難な試みであったかを示している。そもそも近代の宗教は現象的にもきわめて多面的な内容を含み、また概念的にもそれ自体のうちに容易に解消できない緊張をはらんでいる。近代の宗教は理解と解釈において大きな困難を抱えているという事実は、「宗教的な象徴言語の政治化」や「《支配と浄福》（ヤン・アスマン）に関する拡散した多くの合金作用」、そしてそこから生じる「政治化された宗教の多くの新しい形式」を見れば明白である<sup>16</sup>。

グラーフは、ヘーゲルの議論に依拠しながら次のように書いている。「宗教は儀式、礼拝、それによって生み出された社会化だけでなく、合理的にはほとんどコントロールできない幻想的なものへの傾倒でもあり、すなわち聖なる歴史、伝説、神話のなかでまったく別の現実性を今この場で現前するものとして想像する人間の並外れ

---

<sup>14</sup> Friedrich Wilhelm Graf, "Einleitung" in *Politik und Religion. Zur Diagnose der Gegenwart*, Friedrich Wilhelm Graf und Heinrich Meier (Hg.) (München: C.H.Beck, 2013), 7.

<sup>15</sup> たとえば次の論文を参照されたい。Jürgen Habermas, "Religion in der Öffentlichkeit der »postsäkularen« Gesellschaft" in *Nach-metaphysisches Denken II* (Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2012).

<sup>16</sup> Graf, "Einleitung" in *Politik und Religion*, 9.

た能力でもある」<sup>17</sup>。また「宗教的神話は生の起源あるいは世界の始まりについて扱い、存在するすべてのものは神的創造へと帰される」<sup>18</sup>。神話であろうと伝説であろうと、宗教は人間に対して彼が生きている現実とは異なる世界を垣間見せる機能をもっている。そのような世界を作り上げるのが「宗教的な象徴言語」であるが、それは多様な解釈に開かれたものとして人間の想像力／創造力を刺激する。

解釈が多様であるという事実は、同時に同一の宗教のなかにもつねに多様性が存在していることを意味する。そうであればユダヤ教やキリスト教と言っても、一枚岩のごとき統一体を形成しているのではない。たとえば、それぞれの「宗教的な象徴言語は、その秩序を創設する能力を見れば、あらゆる規則のなかで敬虔さをもった生活態度に対して多かれ少なかれ強烈な影響を与えている生の構想としても理解することができる」<sup>19</sup>。もちろん、この事実もまた、さまざまな宗教や教派のなかに単純に一致や同質性を求めることができないことを示しているのである。

グラフによれば、宗教的な象徴言語における解釈の多様性や開放性は「政治と宗教に関する緊張に満ちた主題領域」<sup>20</sup>にも関わっ

---

<sup>17</sup> Ibid.

<sup>18</sup> Ibid.

<sup>19</sup> Ibid., 12.

<sup>20</sup> Ibid. 政治と宗教の関係は、両者の〈区別〉の問題とも深く関わっている。T. レントルフは、キリスト教理解にとって「差異化」や「区別」が重要な役割を果たしている点を指摘している。管見によれば、「差異化」は、「個別化」や「多元化」という類似概念とともに社会学においてもよく議論されているが、キリスト教が他の領域からみずからを区別すると同時に、キリスト教内部のなかでもほとんど無限に差異化と個別化をくり返しながらか、結果的に多元的なキリスト教が社会のなかで事実として、あるいは歴史的現象として存在している。キリスト教に限らず、宗教をさまざまな文化の複合的な統一体として考える場合、「区別」「差異化」「個別化」「多元化」の概念はきわめて有効な分析概念になるだ

ている。ユダヤ教、キリスト教、イスラームを例にとっても、その聖典においては人間の共同生活に関する法的ならびに道徳的な規則が多く語られており、ヨーロッパのキリスト教もまた多様な「社会教説」をもち、「政治的なものの倫理」や「社会における善き生活のイメージ」を独自の仕方でもって発展させてきたのである<sup>21</sup>。この問題を根本的に論じた書物として、E. トレルチの『キリスト教会および諸集団の社会教説』をあげることができる。

このような宗教史の理論的反省から得られる知見は、先生の御講演におけるブルトマンの神学的立場の問題と密接に関係するだろう。すなわち、ドイツ・ルター派の「創造の秩序」と「二王国説」の教説が、現実の政治においてはいかなる仕方でも解釈され、応用されるかという「政治神学」の問題である。「……ブルトマンはこの時代のナショナル・コンサーヴァティヴの神学者たちと同じ精神を共有している。それ故にブルトマンの論調は、明らかにドイツ民族の宗教としてのドイツ・ルター派の「創造の秩序」や、民族性と宗教との関係において、伝統的な議論の枠組みを破壊するようなものではなく、その政治的議論はいわゆる「民族主義的」である」（講演原稿からの引用）という指摘は、ブルトマンを題材としながら「宗教的な象徴言語の政治化」の問題を歴史的に明らかにしたものである。

宗教的な象徴言語は人間の限界や有限な生の傷つきやすさをわれわれに気づかせてくれることもあれば、専制的支配に対する抵抗の源泉となることもある。「なぜなら宗教的意識が超越的なものと関連づけられていることは……つねに現状を上回る終末論的あるいは

---

ろう。たとえば、次の研究を参照されたい。Trutz Rendtorff, "Religion im Christentum. Beobachtungen zum Status des neuzeitlichen Religionsbegriffs," *Protestantismus zwischen Aufklärung und Moderne. Festschrift für Ulrich Barth*, hg. von Roderich Barth, Claus-Dieter Osthöfener und Arnulf von Scheliha (Frankfurt: Peter Lang, 2005).

<sup>21</sup> Graf, "Einleitung" in *Politik und Religion*, 13.

ユートピア的な余剰としても具体化されうるからである」<sup>22</sup>。このような宗教的な象徴言語の機能は、ブルトマンが「政治的現実を説明するための神話」（講演原稿からの引用）に批判的に対峙した姿と重なるものであり、その主張が前面に出された訳ではないが、ブルトマンの学位論文や教授資格論文の内容にも通じる問題である。

もちろん宗教的な象徴言語は、まったく異なる仕方で機能する場合もある。「それは別の思想をもった者や別の信仰をもった者への憎しみのなかで具体化され、人々に対する軽蔑や不寛容を駆り立て、きわめて頑迷にして教義学的に硬直した世界像を生み出し、盲信的な傲慢へと流れ込んでいく」<sup>23</sup>。その意味では、宗教とは「両義的」で「いつまでも危険」である<sup>24</sup>。ドイツ・ルター派の宗教的な象徴言語もまた、この両義性と危険性のなかで政治化し、支配の正統性の問題と不即不離の関係にあったと考えることができよう。このような議論を踏まえると、先生の御講演は「宗教と政治」の一筋縄ではいかない関係をブルトマンの神学思想のなかに見たのであり、それはブルトマン神学の解釈にとどまるものではない。今日、神学のアクチュアリティを主張しようとすればするほど、〈政治的なもの〉は〈政治と宗教〉という近代的区別を難なく乗り越えて、神学の前に立ち塞がることを知らなければならないのである。

### 3. 「神学の自立性」について

ブルトマン神学の政治的意図として、「神学の自立性」という問題があったことも指摘されている。すなわち、「政府の政治政策や文部行政の指導や影響を強く受ける神学部においては、神学が教会に対して政府の政策を裏付ける神学や政策を無批判に受け入れるための御用神学を提供するためのシステムになってしまう可能性がある

---

<sup>22</sup> Ibid., 14.

<sup>23</sup> Ibid.

<sup>24</sup> Ibid.

る、ということなのである。それ故にブルトマンは神学の自立性を強く主張し、神学を伝統や教会という制度からではなく、どこから始めるべきなのか、という問題」と取り組み、「新しい神学部の神学」が必要だと考えていたと言う（講演原稿からの引用）。要するにブルトマンは「神学と教会との伝統的な関係が御用神学を生み出す温床になっていると考え、両者を切断し、神学の自立性を主張したのである」（講演原稿からの引用）。

「神学の自立性」の問題は、言い換えれば学としての神学の位置を問うことにつながる。これは、より大きな視点から見れば「近代における神学」という主題を言い表しているだろう。なぜなら神学が伝統的な教会の軛から解放されるという問題意識は、それ自体すぐれて近代的なものだからである。

T. レントルフは「神学の近代化は教義学の歴史化として始まる」<sup>25</sup>と書いている。聖書の起源が歴史的に反省されることはそのまま教会の権威批判を意味するが、それは同時にみずからの時代に対する歴史意識を醸成し、神学的思考に自由をもたらししたのであった。教説を形成する者、そして彼を取り巻く社会的・個人的世界もまた「神学的反省の主題」<sup>26</sup>になった。これにともない「宗教的確信の諸条件に関する文化的に反省された知」は一つの解釈学のかたちをとり、「神学の特殊近代的な形式」となる<sup>27</sup>。また教説の内容と形式は区別される必要がある。「そこでは教説の根本的な意図は、変わることはない解釈学的基準点として、不変のものを形成するのに対して、教説のその都度の現実化は歴史的に変化するものを描いており、そのなかには教説にふさわしい実践への意図が見出される」<sup>28</sup>。

---

<sup>25</sup> Trutz Rendtorff, “Einleitung. Theologie in der Moderne-Wege und Auswege” in *Theologie in der Moderne. Über Religion im Prozeß der Aufklärung*, Troeltsch-Studien, Bd. 5 (Gütersloh: Mohn, 1991), 19.

<sup>26</sup> Ibid., 20.

<sup>27</sup> Ibid.

<sup>28</sup> Ibid.

歴史的に多元化する社会のなかで、なぜ特定の教説の内容が拘束力をもつのかという問い、言い換えれば「歴史的解釈学としての近代化はキリスト教教説がもつ規範性の問題を投げかけるのである」<sup>29</sup>。

「神学の歴史化はその内容の道德化にいたる」<sup>30</sup>とレントルフは言う。道德化は「歴史や歴史的变化を判断するための基準の必要性」<sup>31</sup>を指し示し、そのような基準は「教説のあり方の改良」<sup>32</sup>について語られるとき運用されるのである。また道德化は「宗教の目的規定における一つの変化」<sup>33</sup>を告げている。「教説の改良の目的は教説それ自体ではなく、教説が人間にとって何を意味し、何をもたらすのかということ、つまり啓蒙の言語を使えば人間の道德的な改良にある」<sup>34</sup>。すなわち、教説はその機能において吟味されているのである。こうして神学の近代化は歴史化の観点から見れば変化する近代社会と教会、また道德化の視点を踏まえれば人間の道德的主体の議論と密接に結びつきながら、「近代における神学」という主題を形成していくのである。レントルフはさらに、「宗教の道德化はそこに内在する宗教理解によって新たな脱歴史化に行き着く」<sup>35</sup>と述べている。「なぜなら宗教の道德的理解の観点においては本質的なものは人間、つまり人間性をもつ何らかの仕方での無時間的で普遍的なもののうちに固定されているからである」<sup>36</sup>。

レントルフの議論は大変興味深いものであるが、これ以上彼の議論を追いかけることはやめよう。むしろ、このようなレントルフの指摘から御講演の内容のもつ理論的な意義がわかるだろう。第一に「神学の自立性」の問題は、神学の近代化＝教義学の歴史化という

---

<sup>29</sup> Ibid.

<sup>30</sup> Ibid.

<sup>31</sup> Ibid.

<sup>32</sup> Ibid.

<sup>33</sup> Ibid., 21.

<sup>34</sup> Ibid.

<sup>35</sup> Ibid., 22.

<sup>36</sup> Ibid.

長い歴史的プロセスのなかで、おのずと生じた必然的な課題だったのではないだろうか。ドイツという一国家の大学システムの問題とはいえ、そこにはつねに近代世界のなかで批判されざるをえなくなった教会の伝統や権威が透けて見えるのである。ブルトマンもまた、ますます先鋭化してゆく歴史主義の時代のなかで、教会の伝統や権威を相対化しながら「御用神学」に成り下がらない神学の可能性を探っていたのである。

第二に近代化のプロセスのなかで、教会の伝統と権威の相対化と同時に教会の教説も無批判に受け入れられなくなり、教説はその機能（「教説が人間にとって何を意味し、何をもたらすのか」）において測られるという事態が生じたが、それは神学が人間の道徳的改良につながることもあれば、支配の正統性を担保する機能をもつこともあるという事実を示している。もちろん古代においても神学が当時の支配体制を正当化する役割を担うことがあったと思うが、近代以降、プロテスタンティズムの誕生とともに、教義の解釈の幅が広くなればなるほど、政治と蜜月時代を築いてしまう可能性が大きくなったのではないだろうか。それは意図せずとも、そのような結果を招く危険性が増大したことを意味する。そもそも政治化することを意図しなくとも、「創造の秩序」と「二王国説」が〈民族〉の名のもとで語られ、一つの〈近代国家の政治システム〉を正当化するという事態は、古代や中世とは異なる神学の近代化がもたらした一つの帰結だと思われる。

以上二つの点にふれてみたが、Theologiegeschichte の方法に則った研究は、社会史や時代精神を考慮しながら当時の神学の機能を分析したものだと言えよう。しかし、T. レントルフが「近代化」（Modernisierung）「歴史化」（Historisierung）「道徳化」（Moralisierung）「脱歴史化」（Enthistorisierung）という概念装置によって近代神学の歴史を分析したように、Theologiegeschichte による研究の積み重ねは新たな理論的反省、

宗教の一般理論、分析概念を生み出すのだろうか。おそらく神学の機能の歴史的研究＝Theologieggeschichte は、このような問題意識を回避できないのではないか。もちろん、この問題は歴史的に研究することを重視する筆者（佐藤）に対しても向けられていることは言うまでもない。

#### 4. ブルトマンの微妙な立場について

ブルトマンの微妙な立場が「アール・ヌーボーの時代の神学」（講演原稿からの引用）という言葉で表現され、彼は古いヴィルヘルム世代ともバルトのような過激なフロント世代とも通じながら、しかし両者から批判される可能性もあった立場を保持していたのだと言えよう。このことについては、たとえば A. クリストファーセンも第二次世界大戦後に再開したティリッヒとブルトマンの関係を中心にしながら次のように述べている。

1948 年、彼〔ティリッヒ〕は戦後になって初めてふたたびドイツに渡った。マールブルクで、彼〔ティリッヒ〕はルドルフ・ブルトマンとも会った。4 年後ティリッヒは、彼らがいまでは「古い古典的ドイツの神学的伝統をもった二人の最後の生き残り」だという感情を当時分かち合ったことを思い起こした。ティリッヒはこのようなメランコリックな気持ちを伴った認識を、彼よりも若い世代との対比のなかで次のように短く述べている。「なぜなら戦いと戦争の年のなかで、シュライアマハーからトレルチにいたるまでの神学的展開を継続する機会を失ったがゆえに、彼らにとってその断絶はほとんど全体にわたるものだったからである」。似たようなことをティリッヒは、1949 年 1 月 10 日にマルティン・ニーメラーに対して述べた。にもかかわらず、その際彼はブルトマンも彼自身も「バルトから強い影響を受け」ており、彼ら二人は「けっして古いリベラリズムと同一視され」えなかったこ

とを付け加えたのである。リベラルな神学的伝統に根を下ろすと同時にその伝統からの批判的な離脱——このような近さと遠さの両義的で根本的な緊張のなかで、ブルトマンとティリッヒの神学的プロフィールははっきりと現われることになったのである<sup>37</sup>。

神学的伝統の継承と批判という「両義的で根本的な緊張」のなかにあったブルトマンが描かれているが、この時代におけるブルトマンと同世代の神学者の特徴の一つであった「反歴史主義」の問題はブルトマンとどのような関係にあるのだろうか。

一般に神学的反歴史主義者たちは、歴史的思惟によっては相対化されえない思考の場を探したと言われている<sup>38</sup>。彼らは新しい現実性理解を求め、ユダヤ教やキリスト教の終末論的シンボルや啓示論、そして神論を用いながら根本的に新しい時間理解や歴史理解を展開したのである。彼らはこのような企てによって、あらゆるものを歴史の相のもとで見る歴史主義をまさに〈超歴史〉によって克服しようとした。その場合、超歴史的なものをどこに見るかは思想家によってさまざまである。現在の瞬間、絶対的瞬間、終末論的現在、神の啓示、神の言葉——彼らは多様な語彙を駆使し、ときには新たに生み出しながら現実性を理解しようと努める。そして、このような反歴史主義的な試みがいかなる政治的意味をもっていたかが、課題となっているのだと思われるが、ブルトマンの場合はどのようなのだろうか。あるいは、これは御講演のなかにあった「脱神話化は非政治的な、純粹に解釈学的な次元の議論に過ぎなかったのでは

---

<sup>37</sup> Alf Christophersen, “Rudolf Bultmann (1884-1976) und Paul Tillich (1886-1965),” in *Klassiker der Theologie Bd. 2: Von Richard Simon bis Karl Rahner*, herausgegeben Friedrich Wilhelm Graf, München: Beck C. H., 2005, 190-191.

<sup>38</sup> この問題については以下の研究を参照されたい。Friedrich Wilhelm Graf, “Annihilatio historiae? Theologische Geschichtsdiskurse in der Weimarer Republik,” *Jahrbuch des Historischen Kollegs*, 2004.

ろうか」（講演原稿からの引用）という問いに結びつくかもしれない。

「保守革命」という概念自体がきわめて複雑な意味をもっているものの、そのなかにブルトマンをおくということは非常に興味深く、初めて耳にする議論であった。「保守革命」という概念が多義的であることを承知のうえで問いたいのは、ハイデガーの哲学も保守革命の思想を背景にしていると思うが、同時に彼はやはりナチス的なものと無縁ではなかったはずである——むしろ一時期積極的に関わった。それに対して、ブルトマンは保守革命の雰囲気と共有しながらも、ナチス的ではない民族主義にとどまることができたとあるが、その分岐点はどこにあったのだろうか。あるいは、ドイツ神学を考える際にナショナリズムをどのように処理するかという問題があると思うが、ブルトマンは相対的に見てナショナリズムの処理をうまくおこなった神学者だと言えるのだろうか。

## おわりに

御講演の内容は、ブルトマン神学の政治的含意を解き明かすと同時に神学という学問の社会的機能を考察したものであった。そして、どのような神学が形成されるかという問題は、どのようなキリスト教理解が存在するか、さらにはどのような社会状況や政治的動向がキリスト教を取り巻いているかという問題と表裏一体であった。「宗教的な象徴言語」はさまざまな解釈を生み出すものであり、それはキリスト教内部にある差異化・個別化・多元化の原理とも無関係ではないだろう。宗教としてのキリスト教が複合的かつ統一的な〈歴史的現象〉であるならば、その現われ方はほとんど無限の可能性に開かれているのかもしれない。その意味では、基督教会に所属する者として、個別的かつ歴史的な事例を分析しながらも、最終的にそこにどのような複合的統一体としてのキリスト教理解が潜んでいるかという全体的問題にこそ、最大の注意が払われなければならない

いのではないだろうか。このような問題意識のもとで深井先生の御講演を振り返れば、ブルトマン神学を題材としながらも、神学やキリスト教がみずからのうちに抱えている両義的な機能や意味がかなりはっきりと浮き彫りになったと言えるだろう。

(さとう・たかし 北海学園大学准教授)